



喇嘛教における燃燈仏本生図に就いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道学芸大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 江口, 正雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000505

喇嘛教に於ける燃燈佛本生図に就いて

江口正雄

北海道学芸大学釧路分校国語研究室

Masao EGUCHI: On the Image of Mānava Jātaka
in the Lamaism (Tibetan Buddhism)

茲に云う燃燈仏本生図というは別に儒童梵志本生・儒童菩薩本生とも呼ばれるもので Mānava を儒童と訳した所からでもある。

また布髮供養とも云う布施第一とする本生語で、その図像が喇嘛教に於いて如何に製作され信仰され伝承されたかを窺うべく小論を草したものである。

本生説話そのものは起源が非常に古く、それは仏教に於いてのみ限られるというものでなく、古代アーリヤンのもつ民族説話であつたものを仏教が布教上に於ける説話として利用したものであり、その為この説話の中にはアーリヤの要素を多く含んでいるということは、いまさら説くまでもない。

仏教に於ける視聴覚教育の方便として採用したアーリヤン民族説話は巧みに図像に表現せられたことは、仏教が世界教たる性格ではあつても、その中に若干の民族宗教的要素を尠くとも原始仏教期に於いて持つていたことを証するものと言ひ得る。

所謂部派仏教期に於いては在来のこの民族的豊かな宗教を如何に世界教へ発展飛躍せしめるかの大命題を胎んだ胎動期とも見做されることは、この方面からも言うことができるのである。

従来五百五十の本生話については種々論ぜられるところで之が思想史的究明に於いては既に見るべきものがある。(註)

千瀧竜祥博士： 本生経類の思想史的研究

その南伝と北伝とを問わず本生話のもつ時間及び空間への無関心の態度はよつて以つて印度民族のもつ宿命的因縁で今日尚確からしき歴史書のない事実を以て見ても之を徴し得よう。

確かに本生説話は印度古来のものであるに違いないが新興宗教としての仏教が之を採用し布教伝道の方便としたこと前述のとおりであるが、五百五十と云われる本生説話の悉くが仏教的に改作せられたものであると言うことは出来ない。五百五十本生は寧ろ在来の民族説話であると見るが至当であらう。勿論この五百五十本生は今日に総て伝承せられてはいないが南伝の五百四十七本生話が現存するところからすれば所謂五百五十本生はその数に於いてやや信憑するに足る。

さてこの中果して純仏教的説話が幾つあることであらう。

脚色の甚しいもの、臍案もの乃至わずかな脚色程度のものとは精密に検討し分類したならばその度合に於いて、大いに異なるものが指摘されるであらう。

本生説話に南北の差があること、次いで時代によりずれがある事は已に周知の事であるがその一々の説話についての検討は未だ十分に為されていないうらみがある。

燃燈仏本生について之を見れば該本生は多数の本生説話中その構成に於いて他のものと些か差違がある。

而もこの相違こそ実は大乘小乗思想の發達の根底になるので逆説すれば大小乗發達大系の思想

の中心はこの本生話の発達変化にあると言い得る。

燃燈仏本生の如き布施の行業を明すものは菩薩六度の修行で大乘思想の気分は茲に培養せられたものと言つてよからう。

小野玄妙： 仏教の美術及び歴史 p. 359.

釈迦仏が過去世その因位に於いて苦修練行をなし、遂に成仏したとの因縁を説く単純幼稚な説話は小乗系統と見做されるが燃燈仏授記はこれより更に発達した大乘の思想に属するものと考えられる。

「長阿含」「中本起」に説く過去九十一劫前、毘婆尸仏出世乃至錠光仏出世して儒童菩薩に成仏の記を授くというは大乗神話発達の根元でこの際九十一劫と過去仏が問題とされる。

「中本起経」及び「修行本起経」に説くところは次のようである。

阿難曰、吾昔從仏聞如是、一時仏在摩竭提界善勝道場元吉樹下、徳力降魔覚慧神静、三達無礙度二賈客、提謂波利、授三白歸、然許五戒、為清信士、已惟昔先仏、名曰定光、拜吾仏名、汝於來世九十一劫、當得作仏、字釈迦文、号如来至真等正覚明行成為善逝世間解無上士道法御天人師衆祐、度人如我今也、吾從是來、修治本心、六度無極、積功累行、四等不捲、高行殊異、忍苦無量、功報無遺、大願果成。

(中本起経卷上・後漢西域沙門曇果共康孟詳訳 転法輪品第一)

とあり、また修行本起経卷上現変品第一に説くところは更に詳細に涉り梵志儒童の本生説話を説きおこし五百銀錢をもつて五莖花を購ひ錠光仏に献華し布髮して地に着け仏に踏ましめた。

該本生話のやまをなすところ皆説き、ついに

仏告童子、汝却後百劫、當得作仏、名釈迦文(漢言能仁)如来無所著至真等正覚、劫名波陀(漢名為賢)世界名沙椀(漢言恐畏国土)父名白淨、母名摩耶妻名曇夷、子名羅雲、侍者名阿難、右面弟子名舍利弗、左面弟子名摩訶目犍連、化五濁世人、度脱十方、當如我也……と因縁を証し過去世百劫たるものが何如九十一劫に減らされたか即ち九十一劫の数字は三阿僧祇の後更に百劫を徑べきを修行精進の功德によつて九劫を超越したと説く。

……菩薩勤苦経歴三阿僧祇劫、劫乖欲尽、愍傷一切、輪転無際、為衆生故、投身餓餓虎、勇猛精進、超踰九劫、能仁菩薩、於九十一劫、修道德学仏意、行六度無極、布施持戒、忍辱精進、一切智慧、善權方便、慈悲喜護、育養衆生、如視赤子、承事諸仏、積徳無限、累劫勤苦、通十地行、在一生補処、功成志就、神智無量……

この九十一劫説は特別に意味深いものと解されないが畢竟尸棄・毘婆尸・燃燈・宝蔵諸過去仏を中心とした本生説話はその思想の根本となりこれにより単純より複雑小乗より大乘にと発達したものと見做されるに至つた。

小野玄妙： 仏教の美術及び歴史 p. 360.

燃燈仏を本位とする本生説話を縦の発達体系として眺める場合、先賢は次の如く説示している。

第一 原始的思想

七仏父母姓字経、長阿含経、中本起経、修行本起経、増一阿含経、悲華経等

第二 発達体系

七仏父母姓字経、長阿含経、Mahāpadāna Suttanta. 七仏経、増一阿含経

第三 発達体系

中本起経、修行本起経、太子瑞応本起経、六度集経、異出菩薩本起経、過去現在因果経、密跡力士経、千仏因縁経、Manual of Buddhism. 無量清浄平等覚経、阿弥陀経、無量寿経、阿弥陀鼓音声

王陀羅尼經、觀藥王藥上二菩薩經、拘旬神咒經、陀隣尼鉢經、東方最勝陀羅尼經、東方最勝燈王如來經等

第四 發達体系

薩曇分陀利經、妙法蓮華經、六度集經、賢愚經、增一阿含經、大乘悲芬陀利經、悲華經、賢劫經、正法華經、觀世音授記經等

これら經典に現われる過去仏を仔細に検討すれば縦の大乗神話發達を辿ることが出来るし、燃燈仏を本位とした本生説話も同様これら大乗神話の中心につねに位していることを歴然と知ることが出来る。

★ ★ ★

燃燈仏本生に就いて何故特に之を重視し且つ茲に論述せんとしたかについて言えば、この本生説話がかかる重要な位置を占め、大小乗經全般に説示され、古代印度美術に於いては本生図像が非常に多く遺存せるにかかわらず、燃燈仏等の所謂大乗神話的本生図像がないという事実である。而もガンダーラ及びその以北の地にあつては燃燈仏關係(ここでは特に儒童梵志本生を指す)の図像が俄燃豊富になることと照し考へるとき、大乘仏教がガンダーラ及びその以北の地に於いて發達したものであるとの推測は許されよう。

大乘仏教發祥の地点については何処とはつきり指摘し得ないことは甚だ残念であるが、地方的に概ね推定し得ることは思想の流れとしてでも考えられるが、その思想の裏づけをなす説話——特に燃燈仏本生及びその説話を表現せる本生図像の遺存品が数多く挙示出来るところから比定し得ると論ずるは認められねばならない。

所謂喇嘛教とは西藏仏教を指して言うに異ならないから、喇嘛教は西藏仏教であり、この西藏仏教は印度後期密教を主流とするものであること縷言を要しない。

拙稿： 西藏仏教美術に於ける尊像の多様性について (北学芸紀要)

前述燃燈仏本生を中心として縦の發達体系を見て来たわけであるが、之を横の流伝關係に於いて其の経路を辿ることも亦必要である。

バルハット・サンチー等の遺蹟に於いては古代印度美術の代表的遺品に接し得るが特に本生図像はその数が夥しく、本生美術がむしろ中心をなしていると云つてよいのであるが、不思議や儒童梵志本生図像は一も見出し得ない。

而し北印度に於いてはユースフアイ・サンガーオ・シクリ等にはこの儒童本生図が発見されている。

Yūsufzai: W. Griggs: The Ancient Monuments temples and Sculptures of India. Plate. 101.

Sanghāo: W. Griggs: ——— Plate. 114~6. 140.

Sikri: A. Foucher: L'art Gréco bouddhique du Gandhāra. Fig. 139, 140, 141.

北印に仏教が流伝して大乘思想が發達したと見られるが、この大乘仏教が更に北伝して漸て西域・中国にと系路を辿るのであるが大乘仏教は一方却つて本地たる中央印度に逆流しているとも見られる。

その謂はこの儒童本生が密教とともにネパール・チベットへ後期密教期に於いて流入したと考えられるものがあることである。

後期密教はパーラ王朝時代に隆んであつたことはターラナータによつてかなり知り得るし西域記・求法高僧伝等によつても窺い知ることが出来る。

西藏仏教はこれら大乘仏教の諸要素を未消化のままに受け継いだが、勿論十分な理解が為され

たとは思われない。而も西藏仏教は仏教帝国の建設と国威の発揚と相俟つて漸次蒙古の準アジヤ高原地帯に伝播し教権を拡張しつつに元朝に至つては的確に中原に根を下した。

勿論唐代に於いて交渉事はあつたが政治的な事項に止まり宗教及びその美術という交渉事とは遙かに性質を異にする。

西藏仏教自体ランダルマ王の排仏に遭い所謂前期弘通 (Sñā dar) の時期を経て、後期弘通 (Phyi dar) 期に入り謂はば基礎固めの時代とも云い得る。

西藏仏教が仏教として確立し、これが教線を拡張し今日の大に至らしめたのはツオンカーワの時からである。

ツオンカーワ即ちアムドの聖者——ロトエ・ギエンツエンについては稿を改めて述べたい。

★ ★ ★

今日の喇嘛教々団は殆んどこのツオンカーワの流れをくむゲルクパ派によつて占められているが、この喇嘛教に於いて儒童梵志本生図像が製作され信仰されている事がある。

即ち旧奉天博物館所蔵燃燈仏本生図が之を物語る。

本稿に於いてはこの遺存現図を中心に論を展開したい。本現図は逸見梅栄博士により紹介せられたものである。

逸見梅栄： 滿蒙北支の宗教美術。七。喇嘛教絵画資料篇下。図番号 1, 2, 3, 4。
(奉博 88. 45 の 1, 45 の 2, 45 の 3)

逸見梅栄： 滿蒙の喇嘛教美術。図版・奉博 15 燃燈仏本生図 (布髮供養)

逸見博士によればこの四図は保存状態が比較的良好であるところから承德より奉天に移されたものであろうと推定されている。

絹本着彩、各幅 0.63×0.38。製作時期を清朝乾隆帝頃のとされる。

図案は略同一で、中心仏は宝冠を頂く菩薩形、持鉢、赤身の無量寿如来を中央に大きく出し、蓮華座より下部の面に説話図を描いている。

その説話図の如来像の辺に記文があり、それにより燃燈仏本生図なることを知ることが出来る。本生説話図の図様を各幅に分つてみると

第一図 日主王が月上夫人との間に将来燃燈仏たるべき王子が生まれられ婆羅門が王子の相を占つているところ。

第二図 釈尊の前生として雪山の麓に生れた雲王子が後来妻たるべき因縁をもつ少女より燃燈仏に供養すべき五茎の華を購ひ如来に奉獻するところ。

第三図 雲童子が頭髪を泥土に布き燃燈仏の足を泥土に汚さぬべく踏んでいただくところ。

第四図 燃燈仏の蓮華城への飛錫説法の図。

と目せられる、

この本生説話の典拠となるものは非常に多い。いま茲に略記しても凡そ次の十八經典を算え得る。

修行本起經現變品第一、太子瑞応本起經卷上、六度集經第八儒童受決經、異出菩薩本起經、過去現在因果經第一、菩薩処胎經第七、大悲經第三、増一阿含經第十一、大法鼓經卷上、僧伽吒經第二、薩婆多毘尼毘婆沙第五、四分律第三十一、大智度論第四、金剛般若波羅密多經論卷上、仏種姓經 Buddha Vamsa, Divyāvādāna, Mahā-Vastu-avadāna, Bōdhisattvāvādāna-Kalpalatā

Mahāvastu-Avadāna-(R. Mitra :— Nepalese Buddhist Literature)

Bōdhisattvāvādāna-Kalpalatā-(R. Mitra :— Nepalese Buddhist Literature)

この本生説話に於いて図像表現のモチーフとなる性質のものとしては古来三つの場が撰ばれる。ユースフ・アイ・サンガーオ・シクリ等の古遺址にみる図は概ね (1) 僂童菩薩が女より蓮華を購買するところ (2) 仏を迎えて投華供養するところ (3) 頭髪を地に布き仏に之を踏ましめているところ。然もこれら三つの場面はバルハット・サンチーに於いて見ると同じく一図の中に現わしている。

奉博 88. 45 1. 2. 3 の図像に於いては、この題材が各々独立し夫々一幅の画として構成されている。

古代印度美術に重要な位地をもつ本生図像には所謂二重点乃至三重点で構図形成を見ているもので、当時に於ける慣用の手法であつた。

この伝統は遂にわが国の法隆寺玉虫厨子に描かれた据身飼虎本生図(摩訶薩埵太子本生)及び施身聞偈本生図にまで及んでいることは周知のことである。

バルハット・サンチー等のレリーフに見る本生図像は即ち当時の信仰の盛んであつたことを物語るが、ここに燃燈仏本生図を見ることが出来なかつた。

逸見梅栄： 印度古代美術資料と解説。 p. 148～

しかしカニシカ王の仏教帰依により仏教がガンダーラ地方に弘布されると釈尊の直接の遺蹟がないというところから信仰上の権威づけを図つて本生説話を巧みに昇華させ釈尊の前世に於ける聖地ということにして本生信仰をあうつたものと見られる。

この事は僂童本生に限定して見ても、
……従此北行一由延，到那竭国城，是菩薩本以銀錢，買五莖葉供養定光仏処と法顕伝につたえ……
城東二里有窰堵波，高三百余尺，無憂王之所建也，編石特起，刻彫奇製，釈迦菩薩，值然燈仏，敷鹿皮衣，布髮掩泥，得受記処，時経劫壞，斯迹無泯，或有齊日，天雨衆花，群黎心競，式修供養，其西伽藍，少有僧徒，次南小窰堵波，是昔掩泥之地，無憂王避大路遂避建焉と大唐西域記に紹介せられていて勿論該本生図像も並び造られ信奉されたこと数多くの遺品に接し得られるところから肯はれる。

この信仰並びにその所産たる図像は中央アジアにその儘伝承せられた。ガンダーラ遺品，高昌遺品にみる一連の本生図像はこれを証する。

殊に高昌発見の僂童本生図の如きは壁画で従來の浮彫とは原材に於いて大いに異なり運筆の自由性が認められ作画者の意図をも十分察し得るものがあり，それだけに描かれた図像の仔細に涉つて検するに十分で且つこの保存も完全になされているので大きな価値を持つものと思われる。全幅十四に区切り巧みにはがし取つて運搬したものでこの間何等箔落の如きものをみないから同じ搬出にしてもかなり注意を払つたものとみえる。

本生図は元來說話の表現特にプロットの盛り上りがモチーフとなるところから此処に十分な関心が払われるが後世の所謂シルパシヤーストラ的制約をうけるところがないので作画者も自己の手腕を存分に發揮し得るものと見なければならぬ。

この意味から他の尊像の鑑賞とは自ら異にするものがある訳である。

図の中心に定光仏の立像を描く，頭円光並びに身光を以て裹む。図を拝するものより見れば，やや右半身に向け兩足は特殊の靴を穿つ。その膝下に匍臥し漆黒の長髪を地に布く僂童が描かれる。

定光仏の周囲に脇侍の菩薩・神像が図されていてその服装・装身具等多くの興味あるものを含んでいるがこれについては他日論ずることとする。

中央に定光仏を置き諸神を按配した構図は泥地に布髪した僂童菩薩の一モチーフで即ち独立した画図であり，ガンダーラのそれは仏・僂童の配置は同じけれども五莖花購買の図をも併せた二重

契点とは違いがある。

奉博四五の二の頭髪布地の儒童梵志図は高昌発見の該本生図と比較すると甚だ類似している。

この酷似から大きな興味と疑問とが生れて来るので図の中央に菩薩身の無量光仏を置きその蓮華座下に本生図を配する。左に燃燈仏の立像、拜するものよりみて殆んど右向きの姿勢で偏袒右肩、手印は施無畏印に似せている。裙・大衣は素直に描かれているが衣褶線は簡単である。袂支は不明瞭で頭円光身光を脊にし足は素足で左足をやや半歩ほど前に進めているのは行歩の態である。これは物語に副つたもので観音像に見るが如き救済の意味には採り難い。

儒童梵志はその前、膝下に伏し頭髪を長く伸して燃燈仏に踏ましめている。

儒童のこの姿勢はガンダーラ・高昌及び雲崗(石窟寺西方一小窟彫刻燃燈仏授記図)等に見るものと全く同じである。全体の構図から言つてこれは西域中国への伝承をそのままに描かれていると見なければならぬが喇嘛教美術少なくとも該本生図は果してこの伝承の系列の中に算え入れてよかるうか。

★ ★ ★

喇嘛教と清朝との関係は、対蒙蔵懐柔策の一として王朝創始以来専ら政策的に喇嘛教を重く用い、蒙蔵の背反を防ぐために該教の尊重と普及に努めた。

而し一方清朝皇室は固有のシャマニズムを温存し信仰していたことも既に明らかである。

喇嘛教がかく優遇された事は之に随伴する造型美術に於いて非常なる発達を見た。それらはしかし飽くまでも宗教美術の埒内に於いてのことで儀軌の制約をうけることは当然と言わねばならない。

'Sāstra-nyagrodha-parimaṇḍala-buddhapratimā-Lakṣaṇa-nāma

工布查布：造像量度經。

また従つてここに特殊な発達と墮落とがある。

元代帝師巴思叭に伴われて入朝したネパール人阿尼哥が優れた作品を残したと伝えられ、その弟子漢人劉正奉によつて伝承され技はむしろ師を凌ぐと云う、この系統は梵式と呼ばれ中国従来の系統と異にするところから中国にあつてはこの二つの系統が存したことになる。

ネパール阿尼哥の工巧はさらに遡つて如何なる系統に属するかという点については不確かな推論より外にない。

これとは別に、ターラナータによればブッダディシャ王の時代ピンブサーラいでて浮彫と絵画に驚嘆すべきものを創作しこの系統を中国派と称し、次いでニサルガシーラの時代マル国に生れたスリガドハリが現われ卓越した技能を示した。彼の流れをくむものを西古派と称しその特徴としては尊像の腰部を極端に締めた蜂腰に作り手足の筋肉は生硬ならず円滑の活動を誇張して示した。

デブーパーラとシュリーマトドハルマパーラの時代にはグレンドラ国に於いてドヒマーナと名づくる工巧匠が出て彼の子にピトパーロあり、この系統は「東の神」(東方の仏工 Çar-Gyi Lha) と称され、絵画に於いてはこれを東画(Çar-Ris)と云いこの継承者は主として摩揭陀に散布したため「中の画」(d Bus-Kyi Ri-mo)として面目を維持した。

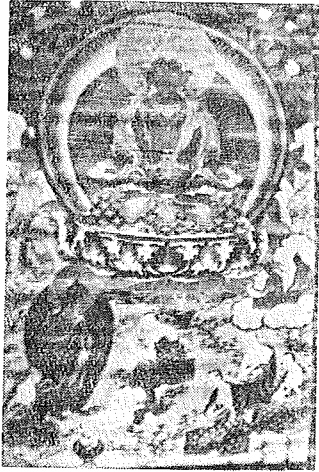
ネパールの工巧流系は西古派に似た絵画でありブロンズ鑄造法は東画派に属した。

寺本婉雅訳：ターラナータ印度仏教史，p. 388.

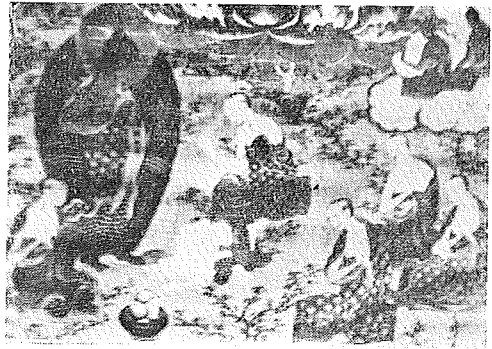
この蜂腰を著じるしい特徴とする画像の様式に梵式が影響し合つたものが清朝喇嘛教美術に於ける絵画とみることは強ち独断ではあるまい。

シュールベルト・ハンメルが謂う Sino-tibetische manier はけだし之であろう。

Hummel: Geschichte der Tibetischen Kunst. S. 43.



其の一



其の二

逸見梅栄博士の喇嘛教図像輯録が完璧なものであるか否かは別として該録が蒙蔵随処に涉つて調査せられたものではないのであるから、この点今後の調査発表を俟つもの切なるを感ずるのは私個人のみではあるまい。

例えば麦積山石窟の美術など調査せられたことは極く最近に属するもので、その東洋美術史に占める位置は甚だ大なるものがある。

ただし麦積山石窟の遺品がよつて以つて東洋美術史を大きく変えるという訳のものでないことは言うまでもない。

個々については或いは特別なものも指摘されようとも之をもつて大局に変化を齎らし観方を根本から改めねばならないということ程左様な由々しい筋合ひのものでもなさそうである。

同じことが、この喇嘛教美術に於いても考えられる。博士所輯以外のものが或いは多く発見され調査されたとしてもそれが俄かに従来の考え方を改めさせるまで重大なものとなるを予想することは出来ない。

所謂正統派的な考えに一大影響を与え之を転機として美術史を書き改めるといふ予測は如何にも困難と思わざるを得ない。

言うまでもなく喇嘛教は大乗仏教である。仏語仏説を崇ぶとともに菩薩説をも併せ尊崇し菩薩を通して仏陀精神に徹底し之を以つて衆生済度の化他を念願とする。言い換えれば菩薩行を裏づけとするので菩薩思想こそ大乗仏教の性格であるとも言ひ得る。

菩薩思想は次いで授記思想を導き出した。この時代こそ大乗仏教興起の頃と見なければならぬ。

授記思想とは弟子の将来の運命に対する解明で菩薩行を行じている薩菩に仏が未来世に於いて何仏として成仏すると予言することである。

観方によれば成仏確定の有情を証することで菩薩思想の闡明でありまた高揚でもあると云える。

燃燈仏本生に於ける儒童授記は正しくこの純粋な思想表明であり、この本生図はその大乗仏教思想の直なる表現に外ならない。

燃燈仏本生図が大乗仏教教団に於いて画かれ刻まれていることいまその一々について述べるまでもないことである。

この燃燈仏本生の授記思想はさらに大きく発展する。而もこの発展のうちで特に注意を喚起す

るものは弥勒信仰の思想の発達であろう。この点大いに興惹かれるところであるがいまは触れない。

干瀉竜祥： 本生経類の思想史的研究， p. 76.

(但し，ここでは本生信仰並びに本生美術が大乗仏教の発達につれて何故凋落していつたかについて論及されていないのは甚だ残念なことである。)

大乗仏教興起の初期に輝かしい明星であつた本生信仰が然し時代とともにその物語りはフェーブル乃至メルメンとしてやがて一隅に逐いやられたのは致し方のないところであろう。

何故ならば，既に本生思想は授記思想と変り，之より未来世に対する弥勒信仰と進み転生，観音の思想よりやがて阿弥陀浄土信仰が確立される発展途上に於いて，過去のものがたりになり了ることはまた従つて当然のことと言わねばならない。

清朝初期に於いて喇嘛教は政策的にとり上げられ之を信ずる蒙蔵民衆への迎合としてわずかに極彩色の本生図を作り得たとしてもそれは己に民衆の信仰とは遠ざかつたものであり，衆生に縁なき本生美術の終熄を飾つた最後の豪華画幅と言つてよろしかろう。

★ ★ ★

本論稿は恩師逸見梅栄博士の御助言と干瀉竜祥博士の御研究に負うところが多い。